大鏡第一

特別
リ5
12897
1

文徳天皇 田邑 仁寿三 斉衡三 天安二
清和天皇 水尾 貞観十八
陽成天皇 元慶八
光孝天皇 小松 仁和三
宇多天皇 亭子 寛平九
醍醐天皇 昌泰 延喜廿二 延長八
朱雀天皇 承平七 天慶九
村上天皇 天暦十 天徳四 応和三 康保四
冷泉天皇 安和二
円融天皇 天禄三 天延三 貞元二 天元五 永観二

昭和卅四年八月七日
村井順氏
寄贈

59-6596

花山天皇　寛和二
一条天皇　永延二　永祚一　正暦五　長徳四　長保五　寛弘八
三条天皇　長和五
後一条天皇　寛仁四　治安三　萬寿二
以上十四代　一百七十五年

冬嗣　左大臣
良房　忠仁公　白河殿　太政大臣
良相　右大臣　西三条
長良　中納言
基経　昭宣公　太政大臣
時平　左大臣　本院

早稲田文庫

さいつころ雲林院のほたいかうにまうてて
侍りしかは例の人よりはこよなくとしおい
うたてけなるおきなふたりおうなといきあ
ひておなし所にゐぬめりあはれにおなしやう
なるもののさまかなと見侍りしに
これらうちわらひみかはしていふやう
としころむかしの人にたいめしていかて
世の中の見きく事をもきこえあはせむ
このたゝいまの入道殿下の御ありさまをも
申あはせはやとおもふにあはれに

まめしくてわひやしらうかしこそつやそ
くららも添ゐつゆをりきこえいたる
をけまそろうかへりしけうかれ
まそりしの人にみれいと添りくをけ
あなたかりしくひつきゆりけれさし
ゆりをしくまもして對面しられ給く
をこくりよ成まひやうしいてつかひ
よりれおもはれいりくうつしうつり
させゆりてさうしとのまへ大臣のかた
貞信公の蔵人少将とやかしもりれ

こゝろうへにわかいる兄さきしこらへさせ
以前の女御后のむすめの御むすめのつるへ
あるにもわかやけのへいりとそいひゆり
りしなさおはやしれこそしはそのまいれ
こゝろくきゝりはひつくしこれけりへ
あらしいふてわかりしのこゝに二十五六のお
んこゝくこそいへ添へしくうつゝきて
うしろさまさくさゆりすもし梅てなし
のこゝろにいゝまそやさしふさいあるたん大
修蔵くて元服りしまゆりし内侍さん

ちり妹はなみそくわかちきしはすつや
きよき人やしとやしとやてきけきとな
むつけるをまつりしすいふはいとわき
さくなりぬるさてもしよりきあ
もはえてをみわかたしぬるつ弁才
るうなりまゆうつひめさくゆのゑみなち
みちくらりそていとあしあらすいよ
老者しちるさしまそ志んちきぬく
いそわるふみうりしてあるらしよ
さけさとみのすゝかなるゆまやりく

やしいそてとしよりわかしもそいよち
はわきふとりいわりしぬやとつたり
とあるて一百五十さいそしてのいなり
ゆりぬるさよしてしさいて百四十ゆいなな
ひくまつゆやへてやさしくやしとそれ
こりのえいつのわしかりてとしの
西月のちの日まておそゆきこ十三代に
あひるてやりてゆるしきゆはさみて
あうとしまてしへしわかさしはま
とちゝたゆくしやしよつゝれまて

きこしなれとしうやくかくりくいふを堂
そうしこまつりつるなよりきさらきて
給けり、いさく給り雨中のよし給り
とりつけりかくさきあ今日よりのれはさる
かしうそきい体りしやれせはふんうし
きこりあやそれつゝいそやこうく
ひとしよきうこおはまるまれわやめて
うひ給そてとつめよしひやすして
十二之まてそひゝ給しくろうし
うしやはそこうりれいこうし山はらし志

さうしは志しのいのりひはうちへまうて
しはえきしまさせは十五夜とおはく
給りけるこかくけるなきちうとうさぬ
をうせあれこれくあいなきんとめんとふさい
うとすへ中くうてこれは宇平をりの
おもくいそめ月なうへ山まれくも山
りしきなりとい給りけるは山おかちま
まくそくきうしなりと時はなるて
くいうてうひ給りけるはなりい山てやま
けりきて十二まてくそわかきころはえ

まいりたまひてきこえしく
あはれなんしられかねその御心ざさん
めのとしろうりしての姫君のきこえ
となみたくまろてもしたまはす
りしさくこひしくきこえ給はぬ
よろしき事にてきこえ給へるはそ
みかどの御みゝやさてまゐらんとも
めぐませ給ひさぶらひていときこえ給されれ
あやまちたまふしるき心はさまちあらむ
そひたまはるにへまゐりては閣下そ

いまみといふてとなりさふらふへきなし
給しうきみのまゐりてとろしくゆゑんし
と出家たまひつれとよもやとしく
あらひたまひつれともわしのきこゆ
ま給ひてなるめさしあはれないひさうらひ
てあくめまてなくてあわれもみそそく
こく禅師まいかとゝまれしてひさし
しりましくたまてのあふともわかつや
そはりくしかにさはへ山りしのよみ
かくりしてあはれさしへてはかたくいゝまし

へのうくまてはありけるときゝ給ては
らんとふかきそへはましものまうくいと
まことあるてなかりてわりしなつかしく
さんさまとみえましらへまうけもしられ
ほしゆらんしとまてゝろんくとも
多かるまししこりしもいりしくとるかりけく
わりけしさつちをうしそらの人ゆゑ
さとものころしくうるさみとこと
ろとありめて人あはあるまにてこみさ
常にそうくらんとあくらんかりしよ

はきくいふや世はうきよありもみそ
やさうとしわきかとそもしくつまいは
わりし給うかし山りしきしこゆのめま
つうまみわりはくみのりよきわくるう
萌えんすやあらしせしまりわくいは
しへのわきくかあるき為とらねとに
めくりくそてえしもてていせきみしせし
今くらのまりりてはとなりしもるひ
けさきみらいわくいあるはいそしこともみ
まゆうりきくつうわわりしまあまれつゝ

さてこそくのかねのこゑはわつかに
なりのみちなりあさとさうしうく
きしきさうちてゝよかくしさてうまわし
ありやうのいよりさのやゝほんとさうつさく
そくりいさて今の入道殿下の御ありさま
のよきそくわくわりしやまてそとも道信
男女のいのちやくやゆんとさよいそと
わかりたりてあまくのこうとくうきさき
たはこのかつとはくつさしるの中
まきいやひ人をわりしまうこれ御わう

さ後やうんとせよかくとこと世の中のまゝあ
かれはたくわつうつるし仏ては仏のて
まいは法花経一部てとききめんとてそ
まいりけいたときのけせてさわそな
つけて五町あまといよことにはあはれなし
みてこしは入道殿の御はんをやにはんと
四十かくまうやうれとふてとひ一本
たをいふてきかしてしうさ
こゆきていやさりとてたかきのとて
その四十あまりしてそひつくせか

世間の摂政関白と申し大臣公卿ときこゆる
いにしへいまのみな入道殿の御ありさまのやう
にこそはおはしますらめとぞいまやうのちご
どもはおもふらんかしされどもそれさもあら
ぬことなりいひもてゆけばおなじたねひと
つすぢにぞおはしあれどかどわかれぬれば
人々の御こころもちゐもまたそれにしたが
ひてことことになりぬこのよはじまり
てのちみかどはまづ神の世七代をおき
たてまつりて神武天皇をはじめたてまつりて当帝

まで六十八代にぞなりにける
すべからくは神武天皇をはじめたてまつりてつぎ
つぎのみかどの御次第をおぼえ申すべきや
しかりといへどもそれはいときゝみゝとほけ
ればたゞちかきほどよりまうさんとおもふに
文徳天皇と申すみかどおはしましき
そのみかどよりこなたいまのみかどまで十
四代にぞならせたまひにける世をかぞへ候へば
そのみかどくらゐにつかせたまふ嘉祥三年
庚午の歳よりことしまでは一百七十六

年ころあやなかりつるはしかくもせし
まさなきことゝもしてはいかゞしきとおもふ
らうしとていひてけりとかや

一
五十五代 文徳天皇と申しけり。これは仁明天皇の御（天安二年戊寅八月廿七日崩、年卅二、九月六日葬于田邑山陵、号田邑天皇）
第一の皇子なり。このみかとの御母、太
皇后宮藤原順子と申しき。左大臣
贈正一位太政大臣冬嗣のおとゞの御むすめ
なり。このみかと天長四年丁未八月にむ
まれさせ給へりしにこそあなれ給ふ人となる

しかるに承和九年壬戌二月廿六日御
元服、同年八月四日東宮にたゝせ給ふ、御
年十六。仁明天皇の御時、東宮にたゝせ給ふ
としてこれみなゝ承和九年八月四日
東宮にたゝせ給ふと申しはまやとはりておはし
しませ給へとおもひ給ふ嘉祥三年庚午
三月廿一日位につかせ給ふ。御年廿四になり
よをたもたせ給ふこと九年。天安二年戊寅のとし
歳八月廿七日うせさせ給ふ、御歳卅二になり
給へなり。御母の后十九にて

うこれうしとしみなりけり女御於子
庚午の歳四月に后にたちたまふ御年四
十三斉衡元年甲戌皇后宮にあらため
たまふ貞観三年辛巳二月廿九日御
出家 潅頂をさせ
同八年丙戌正月七日皇太后宮にあらため
たまふ也五条后と申て伊勢物語に業
平の中将ゆきしこれにもねすん
とさへもひしらぬ時文のりこれやしも
さる嫡めかいたりこそろう二条の后有

かよひ給ひけるむかしのこゝろは
おはしましけるやよひのつゐたちに五
条の后のにしのたいにすみ給ひ中将
てうれしやまてやなりなりつるつまてなりし
ころにおもしけるかや

一 五十六代みつのをのみかと そくゐのとし九
はきのみかと清和天皇と申しけりこれ
いとやむて文徳天皇の第四の御子なり御母
明子皇后宮と申しき太政大臣良房の御女

の御世をしろしめしゝみかとは嘉祥三年庚
午三月廿五日母后の御さとにてうまれさせ給ふお
とゝの小一条の大臣のいゑにてみこの位に
はやくつかせ給ふ十一月廿五日に生れさせ給ひて
そいはかりのほとへてやすまめくらせけり
さんたいし給ひこれ年の御子の東宮
ありさまひしりかんしこれいとかしこくて
おはしませやゝくうまれ給ひし歳の十一月廿日
東宮にたゝせ給ふ天安二年戊寅八月廿
七日御歳九歳にて位につかせ給ふ

貞観六年正月七日御元服 元日の元服なり 御とし
十五にて世をしろしめすこと十八年 染殿院
それより貞観十八年十一月廿九日元慶
十二月四日うせ給ふ御とし三十一 元慶四年
五月八日御出家しこれは水の尾の御門とも申
の御すゑなりしはいまは世に源氏の武者
の名をうけておほやけのかためとなりて
そのなかにもいまに二十三ところみえて
しけりあひける貞観六年甲申正月
七日良房おほきおとゝの太政の位につく
四十一年ありしまて染殿の后と申す

乃河内御祈信より高郷の師にならひし
まて天安二年 歳八月廿七日にそうし給ひ給ふ
たまひき文徳天皇は山にとゝまりて
あいりみ給ふの御いのりかなはすしてそかくれ給ひぬ
今上の御ゆつりし天安二年に唐よりかへり
たまへり

一　五十七代　[illegible]
はしめのみこ陽成天皇と申御門は
なまへ清和天皇第一の皇子也　御母
皇太后宮高子と申贈太政大臣長良のむすめ
となり[illegible]貞観十年十二月十六日
染殿院にて生れさせ給ふ
同十一年二月一日二歳
にて東宮に立給ふ同十八年丙
申十一月廿九日位につき給ふ
九歳元慶六年壬寅正月二日元服御
歳十五世をしろしめす事八年 [illegible]
[illegible]
八十一にて天暦三年九月廿九日かくれ給ふ

さきよりは法華の経文には悪世末法の一
年のみとは仰られまうしたまふて
四ひとつけんなくいらしけりあまて仏乃
滅より此御年まうしよ人の御世
世をたれんすきうときそ人の後よりみて
けさ毎に法華の御門は九年の御
すゑに古七とやらしての陽成院の
ことすゑらせ元慶元年丁酉正月も
后にうちよ中宮とや申しける六日に
年壬刀正月七日皇后宮にまうし給ふ

申しはア千一の后君をやはゝきの給ひし
中よそれかい御けさいまうくきもり
てやかしけり時さい中納の無ひてはく
かくしまうくはひけり七月ぞしとの君と
ち奏経の御国経人御まうすそれらそれ
なしきん知らのまへさんしけるかくし
なかしらけりたる御てもこなまうり
我しすまうとうき給ひてこそ御こと
なまほどとのこれ神よ人まもまそや
そけうそうし法華法ある御乃門し

はゝえていらんしそのさかひをやれ
しましかんわたし給ひけるしもなれ
中宮て深殿のうやまひゝとしもしさし
絵なんほのことは中宮それわたらせ
わたらせ給ふをやしめをとはへ中宮いと
ましけなきにすなはちさへあるれへの
まうしめしたるをおほしいそきへこ
つるたる今伊勢物語正三位しわたしさを給
たあんなるもしまとの世しさはまと
中ましゝあの中なりしひのほとこそは
けぬとをもの世ゝくゝさを給へん
わたらしことを給ふうしはいゝりし
しい中ゝはをしまあるこしわたさ
こしあるけれもみゝくらゝふかし
きこえなりていとやさしきそうの二条
の后と申しいふみの中将しし業平中
将のよひくそにらもぬすのとうら給
ゑのもしるやましみなるこそ御事
なれり

一　五十八代
法きのみかと光孝天皇とも申き此みかとは
ときやすと仁明天皇乃第三乃皇子也御母
ゑし皇太后宮藤原沢子と申き贈太政
大臣総継乃女也此みかとは仁明天皇乃
御時天長七年庚戌東六条の家にて
むまれ給ふおやの中孝のみこと申しし御時
承和十三年丙寅正月七日四品に叙し給ふ御
歳十六嘉祥三年庚午正月中務卿
成給ふ御年二十一仁寿元年辛未十一月十日
三品にのほり給ふ御年二十二貞観六年甲申
正月十六日上野太守にうつり給ふ御年三
十四同八年丙戌正月十三日遷して大
宰帥御歳三十六同十二年庚寅二月七
日二品にのほり給ふ御とし四十同年上野
太守同十八年丙申二月廿六日式部卿に
なり給ふ御歳四十六元慶六年壬寅正月七
日一品にのほり給ふ御年五十二同八年甲辰二
月四日（同月十三日一云）位につき給ふ御歳五十四廿七しら
せ給ふ事四年小松のみかとゝ申その

ゆくまてにつたへの御つかひのころ
よりあさくるしきこえし給はまてこそや位に
仁和三年八月廿六日にを
さそかくれ給ふ御とし五十八

一 五十九代 あるいはなかひしの中納言をきこえ給ひてまうさ うちのみかとゝ申すはなかとの人の御て
はさのみかと亭子のみかとゝも申小松の
みかとの第三の王子也御母は
皇太后宮班子といふ女王と申二品式部
卿一品太政大臣仲野親王の御むすめ
也貞観八年丙戌五月五日にむまれ給ふ元慶
八年甲辰四月十三日うちしになり
王の御年十九にてしもとさゝて殿上人
そなりけるに御殿上のかうしみすまいりそ
なかひの中納言ときこえしひとをめしけるか
ほとゝきすしにまいりけるをかたらひ
ねさうにむまれねむとにいましに位につき給ふ仁
和三年戊申八月廿六日東宮にたゝせ給
て同し日位につき給御歳廿二よくとし
をさめ給十年寛平元年つちのとの
とり十一月廿日つちのとのとりの日のと

の院のみそうしたてまつりて、その御ことかくなりつるひとを法中納言ことくの御いのりをせむ院のおしのはさし
昌泰元年ニ入て、しま四月十日出家を
したまふ。山門いまさ法つはなりさり
延喜十一月六日出家かとよりあそや
入へしまいりつるひかゝるひありさなひる
まうしあそやしくいまうきをひまゝや
せつんに給ひわさるもなりにしてやまう
給ふあめの御うしつかなりしま
つなりんとせりつとそまやうみな

とめとやまさんのわたりそ法ともおしさせ
ぬくとあきいちりおもひんとてるやまむ
まかせ法をなふつきてにそこまて好事せそ
すきをまつちりわたりを給ひつるすれ
えまそすをいくことやうしめのつまなる
法をまうつさやりやあらよそちろくなり
給ふよてくいさりやうえを給ふいうる
ことみとんかてわたりなそかゝるく給ひ
ををまうけたつらんしのまうりきさや
ぬつるそしかゝの御井のゆきさんし

てまつりき第君なりてやまきをおほんはゝみ
田そ給ひけまさやてまて月のさて
のよりの日陰ゐまうい給なくしあま
川あそひのうたとしゆきの朝臣ゐと
けりそうし
ちはやみつりもよやすろのしきこ紅
まろりふつし給ひけし
これしもよりて給りつかまつせ
多年つてもいましはやつ
御しるいにそてひわさを給つゐまと

みかとやまとをもしいとくやいおりしま守
経よつるを給くく二てといふまへしまき
りつるひ右を中納言殿下そそ
し給ふそれ寛平九年七月廿日おりゐを
給ふ昌泰二年つちのとのひつじ十月
十四日出家させ給ふ御名くうりと
申さる承平元年七月十九日うせさせ給ふ
御歳六十五肥前の不しらぬめうし
う後上よさつひけり入道の御の御と
見えてこれのきそつきりりむつかされて

く海のそこにひかりかゝやく玉ひ
ねの葉にみてはかなきものしそうし
へしたるきれてこそりにありけれなる
ましかることこそことのゝくになりぬへき
なんとわかつゝるしらくとわかりし給
ふて御母としかん此后とす長邦の
親王は桓武天皇の御孫にて此の
陽成院の御子上人にて龍林の御寺
にますひ人なりしさきやまへり位に則を
かくはやしきもかんとりかて給ふ

けるにや御しうていは下人にはあらて下ゆ
なるをかゝるゆゑそわかちきこえける

一　六十代〈宇多天皇第一の皇子　延喜の御門とも申なり〉
則さりに醍醐天皇と申き此はれ
ありして宇多上法皇の第一の皇子に
おはしまして御母贈皇太后宮温子と申き
内大臣高藤公〈此公は勧修寺の先祖なり〉の御女なり
この天皇は仁和元年乙巳正月十八日に
生れ給ふ寛平九年に則のとみとし四月

二日に東宮にたち給ふ九歳同七年
乙卯正月十九日十一歳にて御元服又
同九年丁巳七月三日位につき給ふ御歳十
三やそてらひらのたまはくるあいけり
ゆりかすてさしそてわりし御
かつけのにはりとらくし人の中いまそ
まやはくらとあまるを給ひ中せ賢子の
以御養そらしけつるか弟君深かとまれ
そしまし給ひいふかもちみ殿上よりさ
まをあつまこらかひしぬ中納言給ふ

まつりごてわかいゆかり
ひとをれらひそつかてよりは
わしとをゆかく月けせん
こひそり以そしこらられわりゆり
きんらしけなさそら
いもひけあてしつゆかりそあとるの
のちてつ以をあ月とそとそるあ
以さしなと天給ふかそいとた御めてし
しかゆれさてわくし御しけろ
延長八年九月廿五日おりゐさせ給ひ 八日しそ給
ふこそ山 なとおりのちの山すしな山陵とそいし

一 六十一代 将門純友乱あり

朱雀院天皇と申しけるはだいごのみかどの
これもたいこのみかどの第十一の皇子也御母
皇太后穏子と申す太政大臣基経の
おとどの御むすめ也延長元
年癸未四月廿四日にむまれさせ給ふ同三
乙酉十月廿一日東宮に立ち給ふ四歳
同八年庚寅九月廿二日位をつぎ給ふ
八歳 承平七年正月四日御元服
十五歳 十五にてよをしろしめす十六年

わかちよませ給ひて天暦六年八月十五日位をさり給ふ
とおりゐ給ふ三十七 ことしぞうせさせ給ひける
八幡の臨時の祭はこの御時よりはじまりし
これまではりをめでたきよしきこえし
まつりごとにおもむきて御心ばへの
ゆるくおはしまして御めでたき小野宮
よはひまさり給ひてわたくしそうし
これまでははかりことはおもひける
ためにとおほしめしてまつらしめ
しまさりしきこえさせたまへりし
そうしてくしをめでたきことはかれ

そうくはめりくそうくやまし御よの際
けの姿さへみあけまゐらせてのちつゆさ
へかはらしかし
おてわひさせ給ひけるさていくらもか
ゆくをもくくつるへむかうへ人

一 六十二代 天暦帝と申 母上有加等令
村上のみかとゝ申けりこれ天皇と申さは
いはれなりあまうきみかとの十
四の王子なり御母后朱雀院の同しはらなり
おはしまして延長四年丙戌六月
二日生れさせ給ふ（梅方かたて）生れ給をかつ
よそて天慶三年庚子二月十五日御元服
御歳十五同七年甲辰四月廿二日東宮
に立せ給ふ御とし十九同九年丙午四月
廿九日位につかせ給ふ御歳廿一よをしら
せ給ふ事廿一年（あるは康保四年五月廿五日 しを治めしめし四十二御よはひ）
せ給御母后延長元年癸未前坊生れさせ
給ふ御歳十九同廿年女御の宣旨かうふり給
ふ御年卅六同廿三年このみかとをうみたてまつり

朱雀院むまれさせ給日四月廿九日后の
宣旨かうふらせ給ふ事三十九やそてこと
しきありける四月に后にたちてきこえ
なりけるにや四十よく村上むまれさせ
給ふ后にてあさゆふ一日前坊の御
ことなとのちらはしてゆかしかりてやいか
人てなりけるかみかなのことは御ゆるしと
大輔のきみといひけるか奉れしよみて
申しかりける

まさひやいかにしてこそおもへとも

あてさかえたなひかて七やう
又御法事にて人くやかうそうし
くらそいふまれしかりけき
いまはとくらみ山といつはりてこそ
いそれの里にたえむとも
昔のよはゆめかりけれはいつきて
物かゆかしくまきれすてつへ
かはりのとこにゆるしなきて前坊
まうさきれきくきかなしくなけ
ををまよ申しし朱雀院むまれさ

さまふられ給はゝうへをかゝらんこそたゝま
しいかなりけるにかいひつゝ物きこゆる
ゆかりにかゝりしとの事きこゆる事なれ
きこえさせて

一 六十三代 此みかどは村上の第二のみこにておはしまして
わかうよりものゝけになやみ給ひけり

は冷泉院天皇と申しこれ
いとれのみこ是村上天皇の第二
皇子也御母中宮安子と申し右大臣
師輔のおとゝの第一のむすめなり此御門

天暦四年庚戌五月廿四日右衛門のかく
かつまさ従五位下とまうしゝ備前介ときこえし
まかりしものゝ五条の家にてうまれ給ふを
給へり同年七月廿三日東宮にたゝせ給ふを
たまふ應和三年癸亥二月廿八日御元服は
歳十四康保四年丁卯五月廿五日十
八にて位につき給ひてよをしろしめす事
と三年寛弘八年辛亥十月廿四日御か
歳六十にてかくれおはしましけり
と三条院位にたゝせ給ひてよりのちは

大嘗会なとのみゆけいとそおはしまし
まし人申けり

一 六十四代

円融院 寛和元年八月廿九日出家 歳廿七 法名金剛法円 二年三月廿二日於東大寺受戒 正暦二年二月十二日崩 年卅二 同月十九日葬円融寺北原 奉御骨於村上陵傍

つきのみかと円融院天皇と申き
おなしく先帝村上のみこ五のみこ
御母冷泉院の同しはらなりき
みこと天徳三年己未三月二日むまれさせ
給ふ御門のあとのかた(?)をつかせ給

きこえはしさせ給へるこそめてたく
ましてまた人のなかにもまさりてよ
こともなしとも帝のみかと安和二年
八月十三日東宮にたゝせ給御年
歳十一にてそ天禄二年壬申正月
三日御元服十四とし世をしらせ給ふこと十五
年御出家あそはして法名金剛法
申さる正暦二年二月十二日にうせ給
歳三十三母后の東宮二十四にうせ給
はさこそ冷泉院とは申すめれ

またおなじ年のあき山ざとにおはしましてそのまゝにおはしまし
けるついでにうけたまはりしことゞもなり
にきこえたまひし御母これかれもうせ給ひにき
五位下藤原のなにがしとぞ申しし
さるの世にのみさかりをたもちて従三位
しにけりいまはおのがむかしにかはりて
君いとめでたくおはしましけれど
と申けるみかども十六にて
年ごろにおはしまいしにいとあさましくて
とのゝ御うしろみはなれしかば村上の院
の御はらからしきりにうせ給ひてこそ
しつゝおはしましける御なやみありて
にほひありしにけりいかにさとの
さきにもまうしつるおもひとゞめ
御事なり

一 六十五代 諱師貞 寛弘五年 二月八日崩四十一

つぎのみかど花山天皇と申きこれは
このみかど冷泉院第一のみこなり母贈皇后
宮懐子と申して太政大臣伊尹の第一の女也
このみかど安和元年つちのえたつ十月廿

六日母かたのおほち一条の摂政の家にてむ
まれさせ給へるとあるは世尊寺の事にやとそ
見ゆ冷泉院の御時の大嘗会の御禊にあり
同二年己巳八月十三日東宮にたゝせ給
御年二歳天元五年壬午二月十九日
御元服させ給ふ御年十五永観二年甲
申八月廿八日位につかせ給ふ御年十七寛和
二年丙戌六月廿三日夜あさましく
候ひしは人にもしらせさせ給はてみそ
かに花山寺におはしまして御出家入道

させ給へりしこそ御年十九にて世を
たもたせ給ふこと二年その後廿二年はおはしましき
あはれなることはおりおはしましける夜は
ふちつほの上のみつほねの小とより出させ
給ひけるに有明の月のいみしくあかゝ
りけれは顕証にこそありけれいかゝすへか
らんとおほせられけるをさりとてとまらせ
給ふへきやうはへらす神璽宝剣わたり給ぬる
にはとあはた殿のさはかし申給けるは
また御門出させおはしまさゝりけるさきに

まんしかりきんともにいとりて東宮の
ゆゑは御しすゝめ給しけるにいそかいりさ
なんとは、あの御くわりて見けきせ
給けるとそきやけきうけともまはゆくれ
かりのしはつかしまつ月のかゝはりて雲氏
かくてまたしくいりゆきけきいはり
出家は成就あるへきあまたしわかりまこて
あゆくさて　よろいほとゝきゝ殿の女御
のゆくしてみ日ちすのしまてゆめとゝる
あまてゆかんしけるともかいてき

えしくくりはいしを給ひかなそうしあへ
あ殿はまつくはわかりしになりぬとそくて
今まさへたいをのつしきうもくてまう
て見るんとそうしなきこしのひけいさ
はちこうくらひんりしき御はわりしま
もれ晴明か家のまつとわうきぬへさく
川うり入ゝ急つまくてとわひかしく
あるくしくし川まうこくわりいろを給て
こゆの天変ありはかりまてはなりぬめり
とこゆの御さりって参さんくるゆへし

さしくしもちらしよ之こそゆめん
てきりしわたれはおほかたをし
ゐりしきふ一人とりのまゝにおはしけ
けふもやめいみゝえをとしわすて
ゐかしろとやまやりてあんてそれ
うりをきゝてをわりきていへかりと
やまこといつらゝしてまちらかれしは
みちなりせり花山寺によりまし
けりていりしわろさをもひてのちそ
わるゝあいまりいてたるみてうもね

をさくてつなみしくとあんなゐかやて
りなりてまりゆんとやしめひきれお
そふしようあしきこそりなひわらく
冊子りてはつゆんとらきりそうりや
絵もんのわそろしはよ東宮殿とも
しさうてやしめつておやしさりさ
あつてわたしき源氏乃武志あちく
そゐとりのまてさくありけれ京の
とゐくふくはしゝみ流りりそらうそ
まりけりてたまてはめしとく

人まへやかてしもあるとて つまへにけりけるさ
なとしもなくて まうしけるを
在位二年 寛弘五年二月八日
崩御 御とし四十一

一 六十六代
はしめハ一条院天皇と申き 円融院の第一の皇子
御母皇后宮詮子と申 東三条太政大臣
兼家のおとゝの第二の女也 天元三年庚辰六月一日 兼家のおとゝの家にて
元三年庚辰六月一日兼家のおとゝの東三
条の家にてうまれさせ給ふ 東宮にたち
給ふ 永観二年甲申八月廿七日 御とし五歳
寛和二年丙戌六月廿三日位につき
給ふ 御年七歳 永祚二年庚寅正
月五日御元服 御年十一にてなりたまふ
在位廿五年 御母ハ十九にて三后にそなハり
給ひき 東三条の女院と申
き 中宮 兼家の女 藤原仲正のむ
すめ也 寛弘八年六月廿二日
崩御 御とし卅二

一　六十七代
つきのみかと三条院と申き　これ
冷泉院第二の御子なり　御母
贈皇后宮超子と申　太政大臣兼家のおとゝの
一の御女なり　この御門　貞元々年丙子正
月三日むまれさせ給　寛和二年丙戌七月
十六日東宮にたゝせ給　御元服
十一歳　寛弘八年辛亥六月十三日
位につかせ給　御年三十六　世をたもた
せ給事五年　院にならせ給て御目を御

らんせさりしこそいといみしう侍しか
人の見たてまつるにはいさゝかかはらせ
給ことおはしまさゝりけれは　そらことのやう
にそおはしましける　御まなこなともいと
きよらにおはしましける　いかなる時にか
御覧しけん　みすのあみめのいりたるも
御覧しけり　一品宮のわたらせ給へるに
一品の宮のまいらせ給けるに　弁のめのとの
御ゆするにまいらせたるさし櫛をひたりにさゝれたり
けれは　あれはなにそ　とおほせられけれは

そこそてわかきされしのあとにまかりつ
にゐるしもをみてけりのこれ
りしけはわりしやまたさりやさぬ
てありくりしわかきたみてえ
見すしそのけをさわしかれ
ところしくなきをみけりそわれ
に給きわうをみよむひとのいさくつき
おもるしそをよの三条院の御券
とうてえうるすをみえりけり大臣
めんしてりしくわしかなまうなわかるる

きこゆるほとにわかりてかきてさ
をみるとてまてあそふへし興しや
たをみけりきたなくしやまさをみよみれ
さるにかのとくゆるにひめ宮冷泉院
もまうしをみるをしのしうるさみれ四
ゆきそのまゐるぬところは今はいり
ところしれおまたなり給んわかなきて
わりやきりのつくしへ気もよてよしや
たを給けさい代のさるりおもしてて集
花山院のわすしりまさ給へつまさそこれ

いにしへのむかしのことよりいはくろいはて
しましけるそのほとりにおはしましたる
きこえしをこともなかりし風
をかしきおもてともしもよろしからぬ宗
宮のあたりのいとさむけに中なれは
うかりけるかたもなかりける
けりといひしのひのあるをひとあひ
てひろもあひおはしましけるん
ともあれはかるしく人のまねたり給
けるとそいふめりしいふものかう

金椀といふ菓子めしけりとそれ
菓子ひとつ人々にたまひなんとて人
やしないまゐらせ極楽供養のみそれ
のりなおかれてやなきひとつふたつみて
たちは竹のてらおりひやまひとしち
ろつけてかりけるの御くん
をうりとてたひ給へれは佐うしを
絹しあかりは中宮のつきをかへ
むかしきしとのかたあかくさしけ
をれ諌しましけりしをてらおし

かゝりしやうくとしへをわたりまうす
ことしもかのきこしめしはあるべかりしかよ
さかいしくやすの天てもきこえてよからく
こそさはらしこきこしめしへられじりま
さうしこのうちをはなちきこえて仏の御なかり
ひんしみひさしうくもおほくはちとしへの
式部卿かしこきをはなちけるは大入道
殿のおそいとくみなそなきりはなへりせ
まゐり給ひへいとなつかしうしおほくよは
しまして、その人かゝる山やかる御事又

のこともなくされの御ついさうとなちくに
うちにみなてをはなちたまへとらうけ
そこ山院は山にくまなりしかやしは
天智のしかしとして入道殿おとされ
けり 寛仁元年五月九日 春秋四十二

一 六十八代
後一条院と当代にはおはしますみかとこれ一
条天皇の第二王子也 御母はこの入道殿下
道長の第一の御むすめ后宮彰子なり

なかなかにて、あはれに見奉るへかり
四人の御なかに、ことにめてたき
ましく中宮の御はらにおはします寛弘五
年戊申九月十一日生れさせ給へり
きさきの宮、寛弘八年辛亥六月十三日東宮
にたゝせ給ふ、御とし四歳、長和五年
丙辰正月廿九日位につかせ給ふ、御とし
九歳、寛仁二年戊午正月三日御元服、御と
し十一、位につかせ給ひて十年にやならせ給ひぬ
らん、ことし万寿二年乙丑とこそは申すめれ

おなしみかとゝ申せとも、御うしろみおほく
たのもしくおはします、おほちにて
たゝいまの入道殿下出家せしめ給へれ
とも、おほやけ一切衆生を一子のことくはくゝみ
おはします、第一の御をちにてたゝいまの
関白左大臣、天下をまつりことておはしま
す、次の御をちとやしは内大臣にてたゝ
おはします、次の御をちとやしは大納言
おはします、東宮大夫中宮権大夫中納言にておはします
しそおはしますめるにおはします

あさつハれわけゝ山ゝもとゝもいはし
おしなべてはなれまして かゝるおもてなす
ときハりさふさぬものとふかくて一天下
いはゆるかりそめのかさりにかはりてわけをも
たゞ人の身にあらしきそて身をきはめし
一家門の御ゆゝしやみれわれわれそうまける
そまつりくハ次男の中納言一の人のみくえ
たんきあとををへしきてしなつるて
つきんすなまりをひしきてふかく
二のあとハ身てなかしとわかそうき

しかれハ山なしとてハのけまよしはさらて
さし帝王の御次男ハ中さまをとなりて
めでたけれとて入道殿下の御栄花をなく
よろひをあそはされしより御門信の御
ありさまをかたしくつらいはぬとなりて
はなえひなりなりてつきはそてらうて
志ちうてこみゆるとてもしきへやしつあれ
そとうり帝王の御つまをわかれてつき
ま太后の御つまいあらさんとしようへて
おかいなき丸をさこいそしいそいうり

せてしやまくらのまつてきのゐあり夜
とさにうさもけるつまきして方
なよのゆきはもしろ下にもうひき
ろまあさ日のらうくまきし出かり
あつんこらもきうれ又わさかしか家
のめともみわとまうくしものうこの
みしうくとうかりしうてらうきそ
をさあるなもひくあうこのけかう
こにもひくわのうらてみなは
ろうにけそうしくみてきかしき

ともあさきまつりやあふあふきしあはれのことや
ふかきれつま十か年のゝちはきよかり
ひさしくゆりとくゝいもまきてと
さくてかくゆうかりはけきてし
いひてくすてもしもいかゝなりてかそ
そうしきに物もいはくされともみかけり
かくしなうかくこそあるきよやうさく
ひとへにてかりよえれいなのさ
いとんあことしとてけかりんとよ
きけさいふやうしけよいひたる

あさけさうみはあへて色かしと
いまゆくさきのこともみちかう
こゝろさしにかよりさりさくへとてわきさ
爲之補してしめ見てれし
きて文のあとはさうきれは
わしれはゆかすりてきうと
今やぬあれひやいさのはさのうくら
又人のえられにかうまむりひかりん
ちしめやつてやそはかはゝらさうりと
ちうやてきとろあろやいまいめして

のうちぬうこいかのしらうてくて見れ
おほくそわさなしきてようかれり
さうふかつさ思よりはかりしくもあや
したちしきてはかきむかうねかしく
まこひめつうまなんようきうし
まかりいまあやうはかつこてやつてんは
くし多きもしてさうしめをさきいつ
うしの祝ひにかさいのあそてわかりし文
ねきなしうさきい日中説てさくと
わうてつのそうしとゝのへい修信きたり

読経礼法わかくしもゆめ〳〵しらし
きこえのよくへきさはわかきなりまて
うしわひあのあまりしとも気ひて
まとあてもんとなしてきてみさ
りよりきいとわかるしきるくり喜兵
のゐわいさん人へまうつえりしとわか
きうん世中とこりえへてそもち
て祐翁と同てみるしきてすり然
さ給ちえりのこみ中まさてつまの
入道殿下ぬのあきさ陵いまへてきこして

とみゆるもことわりなるやく又ことわりなく
なうひたくいつのなくわかりきさまへ
て一葉の法みえしいはゐあきらかのみなかて
多くさし世間乃政をも摂政関白とかや
とえしめそのよめてゝきこしはそれ
りきさまにし法文要義のすゝまれ
まてなりまめてわかりいこ給ひて入らう
とゝまりてくらうし庵室にこもりへ
きわむことみえしもしもしと
そもいま成つき殿下三位卿の

の中よこの御さまに此君入らせ給ひにかゝり
うまれさせ給ひていまゆくすゑもさきの
人々かゝるわかき人こそおはしますらめ御
まなびや遊びてひとゝひとつにてはじめ
せうにおはせしはなまわかきことのはし
このうしてたまひて世にひきゝ中の
とくいしりおはしますくわのたまひはと
らんとおもひ思ひ給ひとふるめさいまして
しかつきなにとてこゝろありて世う
まてのち大臣にあはしまされ

また左大臣右大臣内大臣太政大臣と申
経天下になりおはしますあはするにもて
これおほしいよ世をしろしめしてはいま
はしまさぬ左大臣三十人右大臣五十七
人内大臣十二人太政大臣は此門のほかよ
まゝおほやけわかくおはしますにてひ
そこにの御わかちあるもひはいつの御代
ちそなりおはしますもきにさきのみかど
のゝみちをたてゝ御こころえ
せ給ふ太政大臣ゆづりてわかくてよせ

めてのち成務天皇にゆつりたてまつり給ひ
わかきほとよりやまとのくにゝつかへたまひ七人
の御門につかへたてまつれり大臣には
なりけるにそれよりつきて神武天皇
よりこのかた卅七代にあたりたまふ孝徳天皇
まてのあひた九代かほとにはひとりのみ八宿
百寮左右大臣はしめてなしおかれ給ふ
左大臣には安保のくらはしまろ右大臣には
蘇我のやまたのいしかはまろ元明天皇
の御時におはしける石川丸大臣孝徳天皇御宇
はしめて元年乙巳大臣になりける此年つ
ちのとのみとり東寺のしはしめてあらされしみ
つきてはかのおほやけにはしめて
七内大臣には大中臣の鎌子のむらし
時年号あらはれしは白雉といふ
又其九代をへりける御門天智
天皇まてはなしめて太政大臣はなし
なりけるさきはやうくはしからすこの四の
皇子にわたりましける大友皇子も正月より
太政大臣になりたまふ天智天皇十年

二月三日しをはりめち大友の王子うまれ
位につかんとてあらそひしかと七月廿三日
此王子ころされてかの王子位につき
給ふ天武天皇と申すかくてしあらそひ
まうし十五年神武天皇より四十一代
あたりをまうす持統天皇又大政大臣にあけ
ちの王子となしめつる天武天皇の王子
も此二人の太政大臣やそへてまうす藤原
つかさ高市王子は太政大臣になりてしをはりけ
りさみちなき政大臣いとひさしくさし

なかりし職員令生ずる太政大臣おく
われものゝ人ならへゆてよそぐおく
てこうまたてよつゝいそなはかりけれ
われもその位のおもむきや四十二代より
あらはれ文武天皇のみつかは年号さる
まうて大宝元年よ又元正天皇のみや
慶雲年丙慶四年丁未二月十九日みこ
入のわかき左大臣正従二位
われたる政大臣とならんより四十一四
これかくこそいかしへたまいしせ
捨政てしはりつ

ましいやうて出家らしてしかの閑院大臣
まで太政大臣十一人つゞきたまへりけし
これらり以下大政官子孫帝の御子なる人
またゝに十一人の太政大臣太政大臣よ
御子なる人ハしもくはしく段なりしはべるめる
となりみれありきこりしちて太政宮
子やうくへ門よりさめて　御門なり掌ハいへる
ある帝皇子れ以下もれ給へるしかし
太政大臣ゝ之て出前しつていけるし
させ給ひの十一人ゆきをめうら二万出家

志かれはいまそかりてこの十一人の太政
大臣なりみ四人まではさしもなかり給
ふ人と思へしなかれとよくてすゑのきこえ
傳ねくまでくうく給へつきと大織冠より
たえしめるてまつりてやつけさとおもはれ
おほかたむかしのことをかしらん
人くもおほかりてこれをたゞなほさると
おほきなる所んとみれをおほして海
師おもしなくてこそあゆてくらわし
させ給へる帝王乃御てゝしも雌の御

よりやて御せうとしみゆつさのおとゝより
こそみつことれ給ひける御はらのおとゝ
よりは才たかくよりなひ給へる人にて
さしもとそ申しける冬嗣のおとゝ
よりは御心ざしのつよくおはしまし
入道殿世をしろしめさるゝをみ給へり

一　左大臣冬嗣のおとゝは内麿のおとゝの三郎
なりこく十二年の大臣にて在位十六年
此のおとゝこの世のおはしましてかくれ給ひて
嘉祥三年庚午七月十七日贈太政大臣

なり給へり閑院大臣とも申すこのおとゝは
わかうしておほくの十一人おはしまし
とくさしてしきことんおほくらのは
かしこくまうしけりかゝりしに御このみ
ゝみえて右贈太政大臣長良おとゝ
太政大臣良房のおとゝたゞ大臣良相のおとゝ
はこのものらなし

一　太政大臣良房のおとゝは左大臣冬嗣の次郎
天安元年丁丑二月十九日太政大臣に
なり給ふ同年四月十九日従一位にのぼり

五十四代仁明の御門の御孫にあたりまします
清和天安二年八月廿七日に位につけるを
すなはち同年戊寅十一月七日摂政の詔あり
年官年爵給りまして貞観八年丙戌
関白ようのことをはじめ歳六十三にしてかくの
ゆるしを忠仁公とおくりなす又白川の
大臣深草の大臣とも申てかくれまし
これおもしくは文徳天皇の后太后宮
明子の御事清和天皇の御母にて太政
大臣准三宮の位にならせ給ひて宮

爵の宣旨をかうふり摂政関白なりしはじめ
てまつりしよりかゝる事はなかりしを
すなはち大臣の位につき給ひて十五年そのかみ
此度そ前代のためしなくて太政大臣摂政
かくて春はさかりのあはれなるをもおほそ
かしけりことにそのわたりをもあはれに
ろさきのわかれもなくさみて山のうへと
おりる中まていとゆかしきものゆへに
おりそてわたりしまへくさ〳〵と内へ
いたしてからぬ夜の月にわたくしに桜の花に

かゝりけれはくゆゑんしてつかうまつるに
せちなりき
年ころかくしてひとはおもひおこたりあまた
花とかみえけれはその思ひより
ふかき花さかりへまかりなとし給ひつゝ
これはかく白河にゐたまひて日毎にかよひ
つかうまつりけり
ちのたまひてはおもてをあてゝ白河は
こゝみちよりていかてかなしき
みる人ありけれはかくおほせなん

かりそめにはたてたるをとこなりしきはなりし
ひとの子なりしかはあなたこなたに
たまはりける長良中納言のむすめに
継ぎて御子とりしはなれぬるか
よそへてもとのみかとにおもひ出てそのほか
まうてまてにわたれるへなりしかはまさき
そしてはしりこまのおなしうまこうちへ
けるとかや

一

右大臣良相のおとゝ此は白河の大臣なり
なり　冬嗣のおとゝの五郎の大臣の位

まく十一年贈正一位西三条大臣より
を浄蔵貴所といふひしりのいまそかりて
子年比叡の山にのほりてすみけるを
此大臣の女御にまゐりてこもりゐてひと
つきにかの御ゆるしの女御をかへさくを
大納言常行のきみとおなし御子二人
かいなき土佐のかみ典薬助の御なか
といひしいとあさましくやむことなきは
かりをもちてかへり中納言にてなん
くのなかにてこそなかりけれ

いまやかやうにてそかくれ給ひ

一 贈太政大臣従中納言従二位左近衛大将長
良公冬嗣のおとゝの太郎母は尚侍大
臣西三条大臣におはしけるおほしまて十三年
陽成院の御ときにおほちにおはしまして
元慶元年丁酉正月に従左大臣正一位又
贈太政大臣枇杷大臣と申すなり此おと
の御子三人おはしきその中に基経のおと
とゝなり給ひて

一 太政大臣基経のおとゝは長良中納言の三

御子にておはしましゝかとも唯人にておはしけるを
醍醐の御門の御祖光孝院天皇なとひとつ村上
二代の御母后にておはしまして此村上の
御母后は太政大臣基経の女穏子と申しき
東陽成院位につかせ給ひて摂政の宣旨を
かうふり給ひし四十一寛平の御時仁和三
年丁未十一月十七日関白になさせ給ふ御
う五十六にて寛平三年正月十三日
にうせ給ひきのちに昭宣公と申きこえて
十年大臣経ること十年にてうせ給ふ

すゐんのとをかうし給ひてみ人ありけり
川の右大臣と申して小松の御門の御母
この后の御せうとにおはしまして小松
御門とはしうとよきにてありけり
おとこやうはたはおはしましてあそ
遊君ともしえまふとをおほけなるうへしまき
のおほしめしたるやうはしかしもしみたまう
ちの御ことにやありてそれほせまえまう
をよろこひて大饗のありけるにかくもく
ありけることはしもそれとはしやの前

はしめとしてさうらひさんさう人々みな
こゑなんのをとゝてあそひくさんし
やのなんはまつくいつかたはしまさん
なんへゆきしかいものあつとやなと
らくいけしをぬちこゑなくいしみなり
そけしそてきぬまうこくあそひち
ぬみはいましくてちうと絵ぬかくしいら
くしこてしそてまつをぬくく湯浴
なり侍をぬへききまうさうついかなる
ところのこまやむてたくて給ふつるへ

よふけてたうき宮瀬とよみはいと
おかしく給はりとひいくぬかつるとみおかしく
宮瀬なりもしくにとぬりて三人まて
つかはしく給はりきしちてあるやとや
出まへ思くしきもあるまかほくはみなた
のきくめのりそて小松のうゑたひ給り
侍らむつかしこゝろのかゝ忠もまも有
てかりたはのまあも侍らへるは侍
しろまゆ絵はつかはちきりらくせ
まかりやゝそ思ひ給なりしちぬ

てふかくさの山にをさめてけるよ勝延僧
都のよみける

うつせみはからをみつゝもなくさめつ
ふかくさの山けふりたにたて
あるひと云堀川のおほいまうちきみ下にかくれ給ひてのち
又りんこけの袂
雄しら人のよろつ心しえうは
ききそちゐさけなしも古今に残す
ともそらしるしるしは堀河院寛院とよみて
まをれしてかり川院とはいはさるに
のれりきましきまてしきりに

たひ閑院とは花のえやすくきこ人しま
まりゆ所はきこて出にちうしゃる
ほと人はうつれ住まさきつるとしきと
しらをたちおりもれしまいしけかり
川院は地形のいそいひしきし大路のお
もてあれ車のちやうなるよみ若
の水車ハ川にうちひんしましていは
そらしれひきそろうまひきけること
かく人あちかのくるまハ川にうら面まして
くるりまてるまはる若の水車のつらき

こたひかたこそはいとあはれにゆかしけれ
とやところは堀河の院なとこそ
きこれはへれつきかし四町にて
四面おちなる京中の家は冷泉院の
みとこそきゝ侍れひとつはよのおほえなる
ましにはまさることなきそてまうしてく
あれこの昭宣公のおはして陽成院天皇の
御をちにてすゑのよにも御時准三
宮の位にて年官年爵をえ給朱雀院
なりひとつゝれかはらすまく御はし

しましよおほえやむことなしとやせ
ところなりゝや御おのこ四人おはしましき
き太郎左大臣時平次郎左大臣仲平
四郎太政大臣忠平ときこえし三郎ときき
まうしきこえになりてまいらしくこの人乃
かゝらん所にしてそれなることにつかれ
きこえしかともみき貞信公はしらせます
よてあすまらち川にかもちてまいり
御しう二郎よりあまの女ごしく従三位にて
家の兼平の君とやてしも給ふまた

さりて傅母にとあてまゐらすこけしろ
のお歌のみこそ也をもてあそぶとて
くもやむことなくおはしましけるを
の二人の大臣あらそふ人こそまで
やさ

一 たゞ大臣何事のおもしろくは我のおとゞの
四の御子中務卿也傅母四品御子也（仁康親王）皇子と申
醍醐の天皇の御子のたゞ大臣の位
までのしようしてのちのきすゑら乃
おもしろき大臣の位はおはしますそ

のおりみかやおきむとしいそまつくおは
ますもたゞ大臣まうのまつりてかくなふ
つき宣旨くだされにたる大臣なりしうちの大臣
りたゞ大臣四十一才八九つなりし右大臣
四歳又十七八のなやおほしけむとまにより
まかりてちらすち陽しそうぬわ
ひる右大臣まいもらにされなりてかね
そうしおりつみとまてきとうなり
うしあくおうしまへしたゞ大臣を傅きし
もまうく候ってこれかゝるおもひつるみ

うり右大臣の御おほえことのほかにおはし
ましゝに左大臣やすからすおほしたるほ
とにさるへきにやおはしけん右大臣
の御ためによからぬこといてきて昌泰
四年正月廿九日太宰権帥になし
りてなかされ給ふこのおとゝ子とも
あまたおはせしに女君たちはむことりを
とこ君たちはみなほとほとにつけて
くらゐともおはせしをそれもみなかたかた
になかされてかなしきに

おさなくおはしけるおとこ君女君たち
したひなきておはしけれはちいさく
はあへなんとおほやけもゆるさせ
給ひしそかしみかとの
しみかとの御をきてきはめてあやにく
におはしませはこの御子ともをおなし
かたにつかはさゝりけりかたかたにいと
かなしくおほしめして御まへの梅の花を
御らんして

こちふかはにほひおこせよ梅乃花

あるしかしとて春くさまの都
みてしみえしにあしけるを見
なれゆくまゝれなしさくりとなりて安
きことゝもしらてなりてしかま
なきことにそりく法をすれ移りしこ
くわりしたひきてやそて出さ行きく
出家をしと弱ていりをみほとさとも
かりしさまにしわかりのほうつくおもく
とかなりたにあそれりしさつるわは
きれく

君かよやされこそ思をゆくしや
くしあくやてはうへりもしかし
みえりはの国にわるしはさてあかし
のむかやとふかに花とりをし安弱
てしまやみわさのこしてなかつある
まとくゆうんしてはくしをみつる治い
とさなし
騎長安驢背一葉一蔕春秋
はくしにわりしましつきてあそれま
かそそくわくるしゆかへわらうくまかり

きかりのとゆらんして
夕されハ那かし山のはてしもちかう
なかさりてそのえ海さりけま
又雲のしらてあふるつともらんして
山まれとひゆくもの入りくは
けみかと須ハ行きのめ月を
けりしもしとおほしきれけかなたへ
月のあり夕秋
うミなしすいうふみにそともすも
きよきにハ月そてらん

あまうしうくあそえしうりしけり
月見しそハてし好みとそてあ
それ海うにおもろくしきもとはさ
ろ掛てくやれうや詠なとよ
隠へてなうにゆへししいひつ
けるのつてうくへそとあやみあさ
ましくあそれしまめかまりもかゆ
へきりくる人なしもけみちくね
うてほのめせとみうくきしきやし
あうくいよしそへつ袖とうくく

やまひはくるしとそ侍りけり
なやましきさとのうひつて夢
うしかなりはくしのわりしまさて御門
ミこしこそなくわれしまさて大弐のゐ
ところははるかなれとも楼のうへのかはら
なとの心にもあらす御らんしやられけ
るに又いとちかく観音寺といふ寺のありけ
れはかねの声をきこしめしてつくらせ給
へる詩そかし
都府楼纔看瓦色観音寺只聴鐘声
これは文集白居易遺愛寺鐘欹枕聴香
爐峯雪撥簾看といふ詩にまさまに
つくらしめ給へりとこそむかしのはかせ
とも申しけれ又かのつくしにて九月
九日菊花を御らんしけるついてにいまた
京におはしましゝ時九月のこよひ内裏
にて菊のえんありしにこのおとゝのつくら
せ給ひける詩をみかとかしこくかんし
給ひて御衣たまはり給へりしを
つくしまてもてくたらしめ給へ

御らんするにいとゝそのおりおほしめしいて
てつくらせ給ひける

去年今夜侍清涼秋思詩篇独断腸
恩賜御衣今在此捧持毎日拝余香

この詩いとかしこく人々かんし申されき
このことゝもたゝちりゝゝなるにもあらす
かのつくしにてつくりあつめさせ
給へりけるを一巻とせしめ給ひて後集
となつけられたりまたおりゝゝのうたかきおかせ
給へりけるをおのつから世にちりき

こえしなりさてかのつくしにてうせ給ひにしとき
てみえてあはれなる事しく給へし
又大学寮にたまはせてかくしてとせり
しとゝひさしうひとゝてあつき
えいろゝりこやうみめてゝしてよ
ちくしてありてなひとつて給し
うとあひつけのえれそしさちとを
あそそのよそれ給へけさこれしてまつ
すこみかおほえ給の也とゝてこそくて
けはしうてこゝろのよみまめし

ねひけるに今の人のそらことこそありけるにや
とりんしありつるに雨ふらすはうらみ
めたひて
雨のしたはけにかはれなれや
きこしめしたまはひのもとならは
やまとうたをよみてうたへはふりけり
小町はそらみたりとおほさしめすて
海のうちに於てもうしろの小町ならては
きさて人しも神にかへしまても業平
やけしも行幸をしめ給ふてとうしこれ

業平朝臣はくしつかりまいて雨乞楽
あらしとひくわかやけける剣御雨はふ
さて後こそしからしたりける内裏やりて女
ひらきつらしよりつしに関路氏の
時の手也こともうちとても
ふりしくわうちてまうか出しそ哉
あしみをまいりておるしきのふかう
そらん地のこへしけてうゆるところ
のありけ道いそしにつかりておもうしよ
つらにもしのそあるなりきり

をみして
はくうしみてやけなんをうりや
山ねのうらに海みれあらんさきりいとまそてあ
まけきそみてこれ小那のあかりしぬへ
後とてそやめりしかくてこれおく
いはくしはわりして延長元年のの
のいそり二月二十一日よりしせ給して
りし以蔵五十九にて後たる院御之の
わらし延長九年己巳四月四日に給ふ後や
わりしりし寛九右臣れ給てて十年そ
なん

わりしりの本院太臣とやまもて此御年おほと
とのもとみれ女御をしを安四條の東宮
も一男八条大将保忠と申しせ給ましし
そのかみ八条によそくるつらに葉師けく
てそうのなりよいつおほされあん参るそ
もちみのいとわりうなりなるそひとりち
いきほとかふかりやさてやさりしのや
まゆめに南てもちたるつるしりつの御家
くなれてあいきほとふひとり御いおほきさ
なそいく中ありて御車そとい

よかりし世給ひけるあまりかなしうこそい
なりしをれとてみてとまりて人の
思ひけむさまなうてはひさき給ふあれ
とれそしすまひ侍給くもの、
なりまさひしやうしうやうかよきやう
まうてきてやまを給ふり所謂宮毘
羅大将とうちあけゝるをわれをくひるとよむ
とおもひけるにおほしけれはにや
はやうてたえ給へり経の文とはいひなから
をこはき物のけにとりこめられ給へる

人にけにあやにくにうちあけ給しさう
つさうたひなりしをみたうふしとて
よ給ひても此君の弟の敦忠中納言にも世
給ひさくまそしきわかの上手管
絃のみちにもすくれ給へりきこれなひ
てはいあそひなとあるをりは博雅
三位のさはることありてまいらぬ時は
けふのあそひはとまりぬとたひく
めされてまいりとてふるき人々は世
のすゑこそあれなき敦忠中納言の

いまそし陪膳たてまつるは三位のおかや
けそうしめでたくてみな人まゐりこゝ
き西にとてはそうありしことなれなひ
けり左府はこやまたてまつりたまひてな
院乃おとゞのむすめにてまゐりて三四人なり
おなじ院の女御をおほきさき中納言のこゝろやまして不
と思しゝ後はおほけなきさうし乃式部卿宮の
こゝろのうちにまつ前大臣女御のゆくゝ
まつりしもうちつゞせくはきいまやさしく
し左府と世おほしとなり大宮に

こまかしきまてよそて送りまつり
らきなれまでなくさめつゝ人もいさゝ
委はあはれにみえてまことにそのなき
ゆるまじき事
悪しきなくさむへはかなくおもひき
後のうらしはかなくこそ
玄上の宰相なるともみやうこの後鳥羽のつるひ
に新中納言中納言かくしもみえいたる
家らせ給ひてかつは中納言にはあひ給へ
るとりさりなくまひなりしかのて天給

ひ常人又花の盛りにそうり給ひみまて家
のけいしそてきなりそとらわい今
ミしこさこや也をなりをそちるんをそ力のち
思ひ出又花をそれ見ひ給ひんをつよの給
ひけるとありを降しきあとしへ給けまそ
あまりしけりてこきんよにく八給りし
おもれ給ひけるか後うとして余すは
そうしそこの思ひちれ中うい太政
云染帰に済せのそうれ顕忠おしうを
そ古わ候をそ成ぬるイそれ经りく

なにおもひしこともさうしおほしとてとかや
ありせんせくあわきおうて家れうち
そても太臣の祝法とかまひぬまゐらす
いあらきのおりいおほろけるてゆきさ
まくすまれしもかみえてまいり
こそんつひおいもそえいりてみかそゝる
まくそてさめらひし御車そひ四人つゝ
ええおいさりけ又ゑんさうしひえて
ゆくもの成おさ寝殿のひんしのまへゐ
なくしてこおけまちいへひきけ

かくてとられさへを仕丁つとめてあまたに
ゆきてまかりてふしけるに人ありてもの
けさせ給ふすておれはきかせ給ひてゆゝしう
そこなはしけるのみ給ひしくなき
なにこともまゐりそへてしいめしうけるに
てるといなともれくかくきこえさせつるそへ
つかてまいりせけりきんやうし給ひけり
さうつきこゝのわりみゆきくゐる人しとこ
ろにてそ右大臣ときこえ給ひしかくもてな
し給ひしかや此なくいみしきそれ

の中に六十余まてなまめかしう中務卿一乃
ふりて大饗し給ひつる人しととこそきこえし
ちかき右大臣と中をまうしけるのきんたちを
なかに四十によそちかくまてこそなかりさ
せにもありけむとみゆ小野宮の御なけきさま
むまつるうたの思ひ右大臣のめのこきこそのめ
宰相とてなかせしつるおこや今乃三井
寺の別当心誉僧都山階寺の権別当扶
公僧都なとこそみきまつりてそのちに扶公
なきなりて乃中納言御なからへし而

まさなくしけり中に兵部卿なかつかさの
君とやむことなき御家にて位
生まれなからにしてみこほしけりの時子なるを
いとくしの女御後緒卿は新寺公の三女
ひとの大納言みかの局もあてならしきう
しかるへき西ませととめひさし
なひたれりしほよりこれならしの御
まちたまへたまへ中宮つくしまへる
なきもいつくしくならせまして
延長の世同じ御位おさつさとれりく

色花をえしつかさせ給えさせ給ひけりて
の夜をいとやさしかるさへしてんえ
かよひさてきさきてらりまいり
給ひて夜とてさらひ給へもそうはと
りめらんしてゆるしきいとあはしくかの
らきみたく織とめてちかくの色
花のさしきいしきあるたみれしの
一の人ともかりし恭齋とみかりてま
まつ候るともをとまやうりまゆ伴
りつくりしわかちとわかちさせ

けふまで命あるもつらくなくてうしとおも
ひわびしけるほどにまゐりてさらく
くるしみてやけふまでいのちく
わすることゝくりしことばかりになりて
御随身のさぶらひまゐるもさいしなれて
いそぎまゐりてそれまでつひの夢とも
あやしと思ひてなむさて帝院の御かた
りと一月ばかりさぶらひてさるにて出給
ひて人なくみえまつるともむさくるしう
わすれかねてあるをなげきさり

さましまでぞよみ世中の色花さへ色し
きこえしからくよりなかりしに
まてさへありそありまむとてみるに
いのちあるを帰るすつけるぞ山だに
たゞみなわびしきてえんせさせ給へ
まゐらせむひてさぬそれはさる
おほしまさるけるかは野わりうとまり
ことをみるあはれなひらかなるよを
られけふまでさまてやむとなくてせら
ましけるにていつくはありてこのれ

とくみちのあとをたづねてかひなくなりゆくし
なげきつゝひけつゝなく〳〵みだれて
まも給ふをあはれがりまつりてこのゆ
もとゝめ給ふとゆめあはれにおぼ
ゆきあひとりよしてあなたへとみ給え
さそけりとていゝかんをまいてまつさ
てこよりひとしくさながらまひあまた
みこみ史紀いさゝりしみつてさうらく
いふなくあまひてこみ拍子をしまてま
はつとくいとあはれやかゝりけれ

てたまはりけるを拍子もえとしまて
まゐりてやうやうひてまつるに
なし右の拍子に浅き中やうに
さひすゝめさせけるをきゝそれにおほそうゝ
かおとゝみゆのまへりまゐりける給けれ
きこし小のうへになしをきていくたびも
く神なりひゞきやうやうてんなどおち
かゝりみえしはかゝりける浪のおく
とゆるとやきさけていつくもゝつき
まことよみしかばしかくて神くだり

露ともこの世は見れなとおもわれなさるゝ
つゝいさてきていかなるつきそくかく
やりてのあひけるはあはれきかせ給へ
さまうちそうみ人中御しらせさせ
まつ我もしのふしかもさすかはや
とまりぬのうちなくわりなき文
よりてまひともあさき世露のなり

以下全て

白　紙